

灰の水曜日

2018.2.14

マタイ 6・1-6、16-18

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

「シオンで角笛を吹き、断食を布告し、聖会を招集せよ」。四旬節を迎え、灰の水曜日の今日、わたしたちも、第一朗読で聴いた預言者ヨエルのことばに应えて、ここに集りました。

「主は言われる。『今こそ、心からわたしに立ち帰れ、断食して、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け。』」。四旬節の始めの今日、わたしたちの主である神は預言者を通してイスラエルの民に告げたのと同じことばをもって、わたしたちに呼びかけておられます。「あなたたちの主である、わたしのもとに立ち帰れ」。この四旬節、わたしたちの日々はこの主のみことばの下にあります。教会の伝統に従って、今日額に灰を受け、大齋、小齋の掟を守るのも、心から主に立ち帰るためです。日常の生活の中から主に立ち帰るためには、預言者が告げているように、心を引き裂かねばなりません。日常の生活にべったりと張り付いたままの心では、主に立ち帰ることはできません。

「今や、恵みの時、今こそ救いの日」。四旬節の始めに朗読されることによって、第二朗読で聴いたコリントの教会への手紙のこのことばも、特別な響きをもってわたしたちに迫ります。「神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません」。「神と和解させていただきなさい」。この四旬節、わたしたちが願い求めるべき恵みは、日常の生活を生きるわたしたちが神と和解させていただくことです。和解が成立するためには、当事者同士が互いに和解に向けて心を合わせなければなりません。和解の手は神の側からわたしたちに差し伸べられているとコリントの教会への手紙は指摘しています。「罪と何のかかわりもない方（神の御子イエス・キリスト）を神はわたしたちのために罪となさって、（十字架の死に渡されました）。わたしたちはその方（イエス・キリスト）によって、神の御前に義とされているのです」。その恵みを、心を引き裂くようにして、日々の中生活の中に新たな心で受け入れることが、神との和解のためにわたしたちの側に求められている条件なのです。しかし、その条件を満たすことがわたしたちにとっていかに困難であるかを、わたしたちは日々痛感しているのではないのでしょうか。心を引き裂くようにしてでなくては、日常の生活を生きるわたしたちは、神が求めておられる和解に向けて歩み寄ることが出来ないからです。

それゆえに、教会はこの四旬節の時を定めて、わたしたちの主である神が、御自分の御子を十字架の死に渡す犠牲を払ってでもわたしたちに申し出ておられる和解を、わたしたちの側からも受けて立つことを求めているのです。

「神と和解させていただきなさい」とコリントへの教会の手紙はわたしたちに勧めています。けれども、神と和解させていただくために、わたしたちの側からすることは何もないのです。和解のためになすべきことは、神の側で全て整えてくださったのです。そのために、父なる神は、その御子を十字架の死に渡されることさえ惜しまれなかったのです。わたしたちに求められていることは、そのようにして、神がわたしたちに差し伸べておられる、和解に向けての恵みのみ手を握りしめることだけです。それだけが、「恵みのとき」であるこの四旬節にわたしたちがなすべきことなのです。

わたしたちは多くの場合、普段の生活の中で、自分がカトリックの信者であることを忘れたかのように生きています。周りの人たちと同じように、永遠のいのちよりも、目先のこの世のいのちに執着して生きているわたしたちがいます。そのことよって、わたしたちが信じているはずの天におられる父なる神との縁をわたしたちの側から断ち切って生きていることを認めざるをえません。そのようなわたしたちに、神はその御子の十字架のお姿を示して、御自分のもとに立ち返って、和解に応じるように求めておられるのです。わたしたちのうちにカトリックの信者としての信仰がまだ生きており、このことが本当に分かれば、わたしたちの心は引き裂かれるような痛みを感じるはずですが、そこから熱い回心の涙が止めどもなく溢れてくることを感じるはずですが、わたしたちが神からの和解の申し出を受け入れたしるしとなるはずですが、わたしたちが迎えようとしているこの四旬節が、わたしたちにとって、そのような「恵みの時」となることを祈り求めたいと思います。